

日本神話の星―客星としてのスサノヲ―

荒川 理生

はじめに

記紀神話を通じ、テキスト中で明らかに「星の神」と記されているのは、『日本書紀』にある星神・香香背男の一神のみであることは、良く知られている。そして、『日本には天体神話が無い』とされ、それは殆ど定説となっている。

それは、ギリシア・ローマ神話に見られる、星座の起源に連なるような形での天体神話が無い、という意味においては、その通りだろう。しかし、そのことが即ち、日本人の神話的な世界観の中で、天体現象に対する思惟が希薄、たという左証とはならない。

星神・香香背男は、天孫降臨に先立つ経津主神・武甕槌命による葦原中國の平定の段で語られる神である。

『日本書紀』本文では割注の形で、

一に云はく、二の神遂に邪神および草木石の類を誅ひて、皆已に平けぬ。其の不服はむ者は、唯星の神香香背男のみ。故、加倭文神建葉槌命を遣せば服ひぬ。

とあり、星の神カカセヲは、ナカツクニのすべてを平らげたフツヌシとタケミカツチの二神によつても従わせることが出来ず、タケハツチを遣わすことによつて漸く服従させることが出来たという。

また、一書第二に

時に二の神曰さく、「天に悪しき神有り。名を天津甕星と曰ふ。亦の名は天の香香背男。請ふ、先づ此の神を誅ひて、然して後に下りて葦原中國を撥はむ」とまうす。

と記される。

「香香」とは、カガヤクの意味で、セヲは兄弟であるとされ、また、ミカはミイカの約であり、神威の大きな星の意味であるといわれる。一書第二では、二神の平定に先立つて、天にあつてその邪魔となつていて、真つ先に服従させなければならぬ悪い神として名が挙がつている。

天津神／国津神という対立を前提として読むとき、天にあつて悪しき神とは、どういう存在なのか、また悪とは何を以つてして悪とするのかといった疑問があるが、本稿では、天津甕星だけではなく、星の神と考えられてきた他の神々の信仰や民俗伝承を取り上げ、古代日本人の気象・天象へのまなざし、宇宙観の再考を試みたい。

一 星は

時代は下り平安時代中期ではあるが、『枕草子』に有名な、星の段(第三六段)がある。

星は、すばる、ひこぼし、タづつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。

西洋天文学の星名で言えば、スバルはプレヤデス、彥星はわし座のアルタイルで、さほど星に関する知識の無い現代人であつても、そのまま理解できよう。タづつは酋の明星、すなわち金星、よばひ星は流星であると言われている。

清少納言が、これらの星々を趣のあるものとして取り上げた理由は、『和名抄』天文部に取り上げられた星の中から、韻律的に美しく、当時の知識人がその星の名を聞いた時に、その背景にある伝説や文化的背景を思い起こすことが出来たからだと言われる。実際、これらの星は、天空にあつて自立つ星で、平安京という内陸の都市生活者にとつてもなじみがあつたであろう。

スバルの古語はスマルで、『和名抄』には宿曜經の昴宿の和名として「須八流」であることが記されている。スバルは、星の群れを上代人の愛した装身具・ミスラルノタマになぞらえられた。そして、丹後国風土記逸文には、浦の嶋子が竜宮訪問の際、スバルの化身である七人の童子^三に出会う一節がある。

またヒコボシは、七夕の牽牛織女の伝説をふまえ、対を成す織女星や、その間に流れる天漢^二天の川の広がりを感じさせる星である。

ユフツツは日没後に真つ先に目に付く金星で、同じく『和名抄』に「長庚」「云太白星」とある。『万葉集』巻第十に、

夕星も通ふ天道をいつ何時までか仰ぎて待たむ月人壮子(二〇一〇)

夕星毛 往来天道 及何時鹿 仰而将待 月人壮

とあるように、天空にあつて一定の軌道を描き、「往来天道」することが既に知られていた。

よばひ星は、「尾だになからましかば」とあるので、彗星ととる説もある。しかし『和名抄』に、別の項目として、彗星の和名は彗星であると明記されているので、清少納言が彗星と流星を天文学的な意味で弁別できていたのかどうかという問題もある。「よばひ」の原義は「呼はう」で、恋人の名を大きな声で呼ぶ、求婚することを意味し、この点に着目すると、流星にまつわる興味深い現象が想起されるのであるが、後で検討を加えたい。

流星(あるいは彗星)の見かけの上でも、本質的にも特徴となる「尾」について、無いほうがかえって良いとした理由はよくわからない。「尾」は、流星痕(流星が流れた後に大気圏に残る宇宙塵の煙のような痕跡)であるという説もあり、このためか、流星を「人魂」と呼ぶこともある。この様に、流星や彗星を凶兆と見ることがあることを清少納言が知って、星の尾に不吉な感情を抱いたのだろうか。

金星は、太陽と月を除いた天体の中で最も光度が高く、夕方の西の空に光っている時期は「宵の明星」といい、その季節には、日没後どの星よりも先に輝き始め、一番星の呼び名もある。一方、明け方の東の空に残っている時期には「明けの明星」と呼び、次第に白み星の消えていく空にあつて、最後まで輝き続ける。そして、およそ九ヶ月ごとに、宵の明星の時期と明けの明星の時期が、交互にくり返される。また、金星は地球より太陽に近い軌道を巡る内惑星であるから、真夜中の空には見ることが出来ないという特徴を持つ。

従来、ユフツツの「ツツとは星のことである」と言われてきた。しかし、同一の天体でこうした規則性があるにも関わらず、ユフツツという名称があつても、アサツツという呼び方はしない。それは「ツツ」という呼び方をするに、何らかの意味があるからだろう。筆者は、以下に検討するように、「ツツ」とは星の中でもある一定の特質を持つ星に対して使われる呼び名なのではないかと考えている。

記紀神話を通じて、ツツという名を負う神として思い出されるのは、住吉大社の底筒男命・中筒男命・表筒男命の三神と、塩椎神であろう。

一方の塩椎神は『古事記』では、海幸彦・山幸彦の山幸ニ火遠理命を助ける神として記されている。

ここに其の弟、泣き患ひて、海辺に居ましし時に、塩椎神来て、問いて曰ひけらく、「何にぞ虚空津日高の泣き患ひたまふ所由は。」と云ひて、答へて言りたまひしく、…(中略)…ここに塩椎神、「我、汝命の為に善き議をなさむ。」と云ひて、即ち无間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひけらく、「我其の船を押し流さば、差暫し往でませ。味し御路有らむ。すなはちその道に乗りて往でませば、魚鱗の如造れる宮室、其れ綿津見神の宮ぞ。…(中略)…故、教の隨に少し行きまししに、備さにその言の如くなりしかば、…(後略)

倉野憲司校注 岩波文庫版『古事記』注には「潮路を掌る神の意であろう。書紀には塩土老翁」とある。塩椎神、塩土老翁を、大方は、シホツチと読んで潮の霊の意と解釈されるが、シホツチあるいはシホツツと読まれる。この神はホ

ヲリの為に无間勝間の小船を造り、潮路を教え、彼方にあつてホヲリの目には見えなかつた綿津見神の宮へと導く。

もう一方のソコツツノヲ・ナカツツノヲ・ウハツツノヲの住吉三神は、黄泉から戻つたイザナキの禊の段で、三貴子の誕生の直前に生まれた神である。

『古事記』には、以下のようにある。

次に水の底に滌ぐ時に、成れる神の名は、底津綿津見神。次に底筒之男命。中に滌ぐ時に、成れる神の名は、中津綿津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぐ時に、成れる神の名は、上津綿津見神。次に上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり。故、阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神なり。

『日本書紀』第五段一書第六もほぼ同様で、イザナキは、海中での禊で合計六柱の神を生み出した。底・中・上のワタツミの神を、全国各地の海部を中央で統括する伴造である阿曇連の祖先神とし、底・中・上のツツノヲの神を住吉大社の三神としている。

真弓常忠氏は、『住吉大社神代記』の補注で、次のように諸説を纏めつつ、自説を述べておられる。

「筒男命の名義は、①「筒」は「ゆうづつ」（金星）の「ツツ」で星の意（吉田東吾氏）②底・中・表に助詞「の」に当たる「ツ」十津の男の命（山田孝雄氏）③対馬の「豆醜」の男の命（田中卓氏）④「ツツ」は船の椎棹で、潮流や航行を司る呪杖（西宮一民氏）⑤船の帆柱の底部にある船霊を納める「筒」（岡田米雄氏）等の説があるが、私見は津々浦々の「津々」、すなわち港湾の守神とする。

このように見ると、①の星と考える説は、海に関わる②④⑤や真弓氏の説と乖離するかの如く見受けられる。しかし、そうではない。

住吉三神は、神功皇后の新羅征討の神託にも現れる。夫である仲哀天皇は、筑紫の香椎の宮で、熊襲を討つべく準備

をしているところに、熊襲を討つよりも、西の方にあつて宝の満ちた国である新羅を討つべしとの託宣をうける。これを受けて、天皇は高いところから国見をするが、そのような国土を見出すことが出来なかつたので、託宣した神を疑ひ、その為の神の怒りを受け急逝する。従来、国見の失敗譚とされている部分である。

天皇の崩御という異常事態が発生した後、あらゆる罪穢れを求めて国の大祓を行う。そして改めて神功皇后は神懸りし、託宣を受けるのであるが『古事記』では次のように語られている。

ここに具さに請ひけらく、「今かく言教へたまふ大神は、その御名を知らまく欲し。」とこへば、すなはち答へて詔りたまひしく、こは天照大神の御心ぞ。また底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神ぞ。今まことにその國を求めむと思ほさば、天神地祇、また山神また河海の諸の神に、悉に御帛を奉り、我が御魂を船の上に坐せて、真木の灰を瓢に納れ、また箸また葉盤を多に作りて、皆皆大海に散らし浮かべて度りますべし。」とのりたまひき。

神懸りした神功皇后に託宣を受けた神は、天照大神とソコツツノヲ・ナカツツノヲ・ウハツツノヲの三神であつた。教えのままに諸神を祭り出陣すると、皇后の船団は海のあらゆる魚の背に押され、順風と潮の導きによつて、新羅の国土の半ばまで到達する。新羅王はその勢いに恐れおののき降伏したので、託宣の通り戦わずして新羅を下すことができた。そして新羅は御馬甘となり、百済は渡の屯家となつたとされる。この伝説から、住吉大神は航海の守り神、あるいは海の戦の神として信仰されてきた。

『日本書紀』では、仲哀天皇の神を疑う態度に対し、「天津水影の如く、押し伏せて我が見る國を、何ぞ國無しと謂ひて、我が言を誹誇りたまふ。」と、託宣を下す神が怒りを顕わにしている。頭注に「天津水影」について、「アマツは高天原の意。ここでは水影の美称。水にうつる影の如くに鮮明に、自分が上から見下ろしている国があるの意」とあるが、海の底・中・上で生まれた神が、空の上から俯瞰した世界を見て語っている点が、非常に興味深い。

『古事記』で仲哀天皇は、最初の託宣を受けて、国の高いところから見晴らして、「國土はみえず。ただ大海のみあり。」と言つて、神の怒りを買う。『日本書紀』でも同様であるが、神功皇后摂政前紀では、仲哀天皇崩御の後、吾瓮海

人鳥摩呂と磯鹿の海人草を派遣して、神の言う国土を探させる。現在の北九州市藍島と思われる地域の「吾瓮海人鳥摩呂」は国土を見つけた事が出来なかつたが、福岡市の志賀島の海人と思われる「草」は、数日して「北西に山有り。帯雲にして、横に廻れり。蓋し國有らむか」という報告をすることができた。つまり、仲哀天皇の行った、土地の高いところや丘に登つての国見では見る事の出来ない土地を、海人が発見するのである。住吉大社の総本社とされている、大阪市住吉区の住吉大社は、現在では内陸部になつてゐるが、住之江の津に突き出した上町台地の突端に位置する神社で、創建時には海に突き出た立地だつた。この点で、一説には大坂の住吉大社創建以前に元来あつたとされる、博多の住吉神社も同様の立地である。神の示した西の国を見るには、高所なだけではなく、海人の視線が必要だつたのだろう。

上にあつて国土を見下ろしてゐるものといへば、太陽・月・星に代表される天体である。岩波の『日本古典文学大系』は、頭注で「筒は星（つ）で底中上の三筒之男は、オリオン座の中央にあるカラスキ星（参）で航海の目標としたところから航海を掌る神とも考えられる。」とある。事実オリオン座は、昇ってくる時には、縦になつて一つずつ出て来るので、海のかなたの水平線から上る様は、イザナキの禊の際に、ワタツミの神と交互に「ツツ」のヲの神が生まれる姿を髣髴とさせる。ほぼ縦一直線に並んで上つてきた三ツ星は、徐々に傾いて天頂では横になり、ほぼ横並びのままに沈んでいく。三ツ星の傾きの角度で時刻も方位も判るので、海にあつては羅針盤の役割を果たす重要な星座であつたことが解る。

『日本書紀』磐筒男命の注（岩波書店） 日本古典文学大系 『日本書紀 上』補注1・五三）としてだが、

島根・杵岐・筑後久留米・大分・香川・徳島・高知で粒をツツという。古く空の星粒をツツまたはツツといつたのであろう（軻遇突智を斬るときに生まれた磐筒男・磐筒女神も、磐から散る火花を名づけたものと思はれる）。

とあるように、「筒」を方言から解釈する説もある。

現代日本では、星や星座の知識は、圧倒的に西洋式の星名や八十八星座の分類で認識されている。しかし、かつては日本独自の星の名称があり、見立てによつて形作られた西洋と異なる星座の形と名称があつた。

日本固有の星の名前の研究は、内田武志氏による昭和初頭のものがある。内田氏は、昭和初頭にあつて既に民間での星に関する知識が失われようとしていることを危惧し、戦前・戦中にわたり星の方言や言い伝えを採集調査し、『日本星座方言資料』^五に纏められた。この調査は、内田氏が血友病という持病を患い、長く病床にあつた為、予め調査項目を絞つて作られた調査票を各地の師範学校・水産学校に送付し、学校を通して回収するという方式で行われた。その結果、作物の種まきや豊作・豊漁（漁期）の占い、時計代わりの星の運行、気象変化の予兆などに関する星の民間伝承が多数報告された。それは、星の知識がまだ生活する上で必須であつたことを示している。

農民には農の、漁民には漁のそれぞれの業を律する目安が必要とされ、そのもつともよい目安として星が見られたのである。それ故、その仰ぐ時刻にしても、作業との関連でなされたことをまず知らねばならず、われわれが今の常識で「星は宵に眺めるものとして、その時刻に見える星座を季節にわけて、春夏秋冬の星座とする」という知識で解釈しようとするのは、日本人の星の見方をほんとうには理解しないことになるのである。

(中略)

「すばるまんどき菜蕎麦のしゅん」という俚諺は、朝起きに空を仰ぎ、ネノホシ（北極星）を背にして南面し、ちょうど昴星がまんどき（南中）にきている時分をもつて、蕎麦のほか菜類の種蒔き季節とする。この時期は九月上旬、時刻は午前四時ごろ、星の位置は上天というように、すべて農作との関連において星名や俗信などを解釈できたわけである。

この内田氏の研究により、星に関する伝承は、主に農事暦の一種として記憶されていることが明らかになり、農民が星の運行にどのように注意をはらつて来たかが知られることとなった。しかし、漁業従事者にとつての星に関する記録は、農に関するものには残されなかつたように思われる。一つの理由として考えられるのは、漁業従事者は、一度漁に出てしまえば半年も本拠地の港には戻らない事あり、就労形態の兼ね合いで、学童期の子供も昼に就学する環境ではなかつたことがあげられる。先に紹介した、内田氏の調査方法は、学校への配票調査という方法であり、調査票自体が、先づ西洋式の主だつた星座を取り上げて、それに対応する地域ごとの方言名などを記述させるといふやり方なので、

西洋名と対照する知識が漁業従事者の側になかったのではないかと推察されるからだ。

しかし近年、北尾浩一氏の調査などにより、漁業従事者は、農業従事者よりもより緻密な知識を伝えていた事が解ってきた。北尾氏は、漁業従事者などへの聞き書き調査を行い、その結果は『星と生きる―天文民俗学の試み』『天文民俗学序説』などに纏められ、『生活環境としての星』という提言をされている。

心意のなかでの星と他の自然環境との連続性は、イカ釣り、気象予知においても見いだすことができる。^六イカの釣れるタイミングを知るのに星を目標にしていた頃の記憶を少しずつたどり始める。

「やっぱり、その時間、時間で、その星があがってくるだっぺ。こんどは何の星が出るから、その星の時間まで待つべかとか。仕事していくべとか。そういうふうな感じがするんだね」

「そうね、これ何の時間だから、何の星の時間で、これ食ったんだな。そんなことを言いよったりするんだがね」

「宵の明星というのは、晩方、この島に上がってるのじゃ。船で行く時分に、六時、七時に。それで、八時ごろになれば、宵の明星のはいるときに魚が釣れるんだ。鱸でも鯛でも何でも。その星のはいるときにばたばたと」

「ネボシというのは、星が太いだな。あまり動かないで。コンパスたてたらな、やっぱり子の方にあるのですわ、その星は」

時計が普及しはじめてからも船に積まない昔人間について語ったケースである。

「ミツボシがあがったけん、何時ごろになるのいうての、おやじら言いよった。うちのおやじが、おい時計がなきや便利が悪かろうよと聞くと、いや、時計はカチカチカチカチというのが耳について夜でも眠れないから、船に積まんのじゃという昔人間がおったがのお、そういう人間は、星をたよりにして……」^七

これらの報告で、海に生きる人々の現場での生々しい伝承を聞くと、潮流と星の運行は、切っても切れない結び付きをもって人々を導いていたことが実感させられる。このことは西洋にあっても同じで、スバルの西洋天文学での名称・

ブレヤデスの語源もギリシア語のブレイン（航海する）にあり、この星団の出ている五月から十一月を航海季節としたためだということにも表れている。

海に生きる人々にとって、広い海原にあって星の運行の知識は生死を分かち切実な問題となった。季節ごとの星の変化はもちろん、一晩の内の星の動きなど、潮流と対比させての刻一刻の変化に注視し、時を計り、星の導きに従って日々をおくってきた。こうした星の知識は、漁業の現場において口頭で伝えられ、個々人の経験として蓄積されるものであつて、文字に定着される事は少なかった。

一方農業では、耕地のある生活圏に留まる限り、周囲を取り巻く森や山並みなどの地形の制限をうけるので、地域ごとに星の見え方が違ってくる。結果として地域ごとに固有の伝承となつてしまい、汎用性に欠ける知識となるために、漁業民よりも星への依存度が低くなるのではないだろうか。

以上のように思いをめぐらすと、先に取り上げた筒男命の名義の問題も、星々の中にあつて、海人にとつて時計や羅針盤のような指針となる重要な星を「ツツ」と呼んだのではないかと筆者には考えられる。あるいは、「ツツ」というのは、海人の文化を根源とする名称と言えるのかも知れない。塩椎神も住吉三神も、見えない海のかなたの国土を指し示し導く事同様であるから、塩椎神も何らかの星であると考えられるので、シホツツとも呼ばれて不思議はないだろう。

三 「スサノヲは金星か」

ところで、かつて故 大林太良氏は、「スサノヲは金星か」^九と題する六頁の小論で、学会の通説として定着している「スサノヲ風神説」に対して、以下のように問題提起をされた。

日本神話における主な登場人物の一人、スサノヲが風の神ではないか、という説は日本神話の近代的研究の発端においてつとに提出されたものであった。（中略）いわば学会の通説として定着し、私もそれに従つて来た。

それにも拘らず、私はスサノヲ風神説には何か落着きの悪さを感じてきた事は否定できない。たしかに日神と争う風神という解釈には、高木が挙げるようなしかるべき根拠がある。それでもアマテラス（太陽）、ツクヨ

ミ(月)の末弟としてスサノヲが嵐では、どうも釣り合いが取れないのではないか？やはり太陽や月のような天界の光体だと、あるいは元来はそうだったと、考えるべきではないか？

こう考えてくると、候補としてあがってくるのは金星である。世界的に見ても、金星が太陽や月と密接な関係のある神話的人物であることは古くから知られているが (Ehrenreich 1910: 130-131, 232)、「我がスサノヲも金星と見てもその行動は不思議ではない。つまりスサノヲが高天原に昇ると、やがて太陽の女神アマテラスは天岩屋に隠れ、暗黒となった。金星(宵の明星)が天に現れ、夜になったのである。そしてスサノヲが高天原から地上に追放され、アマテラスは洞窟から出てきて、光明がよみがえった。金星(暁の明星)は太陽の出現とともに姿を消して行くのである。

このように述べた後、大林氏は、アルタイ・タタール族の神話のエルリク神や、テュルク・モンゴル諸族のエルリク・ハーンについてのジャンポール・ルーの研究、あるいは、S・W・イヴァノフのアルタイ地方のシャマンの研究を引いて、エルリクが著しくスサノヲと類似し、スサノヲが金星である事を示唆しているとの考えを示され、「エルリクII金星をスサノヲ神話と系統的に結びつけることができる」とすれば、それは岡正雄(一九九四、五・六九)以来想定されて来た、アルタイ系牧畜文化にたらなる支配者文化の一部をなしていたものであろう。」との見解を示された。

しかし同時に、大林氏自身、「内陸アジア諸民族のエルリクや金星についての研究途上である。したがって本論は中間報告であり、暫定的な見通し」とし、「問題はアルタイ山地と日本との中間地域をどうやって埋めることができるか」であり、「金星は古代中国において、「軍事的機能の神だった」ことを手掛かりとして「東アジアから内陸アジアにかけて、金星は軍事的あるいは戦士の機能を表すという表象が広く分布していたのかも知れない。」との結語で結ばれた。

大林氏のいわば「スサノヲII金星論」といふべき試論は、アルタイ系牧畜文化の伝播を想定しつつも、日本にいたる中間地点の伝承としては、古代中国の「金星II軍事的機能」を挙げるにとどまっている。注を含んで六頁というこの小論で取り上げた問題を、その後、大林氏が積極的に論じられたかどうか、筆者の管見の限りでは知らない。しかし、筆者も「スサノヲ嵐神説には何か落着き悪さを感じ」という意見に非常に共感し、何らかの天体神話としてのスサノヲの神格の解釈に強い魅力を感じ、以来頭の片隅で「スサノヲII金星論」を検討してきた。

大林氏はいみじくも、

神話の登場人物の行動が、いかに天体の運行とうまくあっているように見えても、それはその解釈が正しいことを必ずしも保障しない。偶然の一致かもしれないし、解釈する側の読みすぎかも知れない。神話学の歴史は、天体神話説の盛衰を通じて、この種の危険を十二分に教えてくれている。

と、述べておられるのであるが、それでもなお、天を眺めて太陽・月・星々の運行に神話的な意味を読み取ろうとする心意は、人類共通のものと思われ、それは古の人々だけではなく、現代人の心の奥底にも未だに残されていると思われるのだ。そうであるならば、大林氏のように、厳密な神話の伝播という観点からの分析にこだわらずとも、いわゆる同時発生的な、あるいは普遍的な事象として天体神話が生み出される可能性を否定するには至らないのではないだろうか。

「ササノヲ」金星論」を補強するにあたり、大林氏は『史記』天官書を引いて太白金星と兵事の関係性から論じられたが、天岩戸神話が、日食あるいは冬至の反映であるという直接的できわめてプリミティブな解釈が受け入れられるのであれば、筆者は、天象の中でも（少なくとも古代の人々にとっては）突発的で予測不能な天体の運行である彗星、あるいは流星を、ササノヲの神格の一部として考えてみたい。

四 「客星」という概念―彗星・流星

古代中国では、前漢の頃、陰陽五行思想を取り込んだ儒家の天人相関説から、森羅万象と人の営みは密接な関係を持つと説かれた。天子の善政は瑞祥となって現れ、失政や悪徳は天からの譴責として、自然災害や異常現象を呼び起こすと考えられたのである。それは災異説をうみ、後漢になると『易経』を基にした易学者との交流から、過去の事象だけでなく、未来を予言する讖緯説にまで発展した。

こうした思想を背景としているため、中国の天文学は曆の制作の為だけではなく、占いのためのものとも言えるので、

天体現象の観測とともに、星座の司る事象や星の運行の意味する出来事を予測し、また、過去に実際に起きた事件や災害を記録し分類をしていた。その為、自然現象の観察・記録を基盤とする学問であつても、現代の西洋天文学の項目とは一致しない独自の分類概念がある。その一つに「客星」という概念がある。客星とは、太陽・月・惑星、そして星座を構成する恒星などの周期性・規則性をもって運行をする星ほしと異なり、通常でないイレギュラーで一時的な天文現象をさす。時代によってその内容は多少変動するようだが、今日言うところの超新星、彗星又は流星、その他発光を伴う気象現象なども一部含まれる、幅の広い意味に使われた。

客星の意味は、漢字の「客」の意味を考えると良く解る。客の漢字の成り立ちは、ウ冠の意味する屋根に、各の（つかえてとまる）とを合わせた文字で、他人の家にしばらく留まる人を表す^{二〇}という。そこから、客の字には「訪問者。他から来た人。」「自分に対立するもの。また主（しゆ）に対する立場のもの」^{二一}「旅先。旅人。」「自分の意思を離れたほかのもの」^{二二}という意味がある。

古代から近世の文書記録に現れる天文事象を数理的に計算・検証し、「古天文学」という研究分野を確立された、斉藤国治氏は、次のように定義された。

「客星とは日本・中国で古くから彗星または新星の意味につかわれていた天文用語である。彗星と新星とは天文学的にまったく別種の天体であるが、きまつた星の並びのなかに見慣れない星つまりお客の星が侵入し、またはそこに出現したというほどの意味では同じである。彗星の多くは尾をもち、そして星座の中を動きまわ^{二〇}」^{二二}

現在は天文学の研究成果により、彗星は放物線軌道あるいは、長楕円軌道をもって太陽の周りを周期的に回る、太陽系の星の一種である事が解っている。有名な彗星として、ハレー彗星、ヘル・ボップ彗星、ウエスト彗星などがある。公転周期が二百年未満の彗星を短周期彗星といい、この二〜三十年の彗星研究の成果として、軌道計算によって出現周期が明らかになって番号や名称が付いている彗星の数は二百を超える。もちろん、彗星の大きさや軌道の関係で、すべてが地球上から肉眼で容易に見られるわけではなく、大彗星といわれるような、特に明るく壮大な彗星は数が限られる。

近年は、コメットハンターなどと呼ばれる、新しい彗星を発見しようとする研究者たちのおかげで、太陽系の彼方から飛来する彗星が、次々と発見されている。それでも、地球に近づくわずか数ヶ月前に発見されるものもあるなど、彗星の出現の仕方・見え方は唐突で、まだまだ謎に満ちた予測不能な存在である。

彗星の本体は核と呼ばれ、主成分は氷（80%は水で、一酸化炭素、二酸化炭素、アンモニア、メタンなどが凍結したもの）でこの氷の中に炭素や窒素、色々な分子の他に、岩石質の砂粒や鉄などの金属の微粒子が混ざった状態で、「汚れた雪玉」に喩えられる。太陽から遠いところでは、低温のため核は凍り付いているが、太陽に近づくにつれ熱によって、表面が蒸発し始める。それによって発生したガスや塵は、非常に大きく希薄な大気となって核を覆い（これをコマという）、放射熱と太陽風により、太陽と反対の方向にダストテイル（塵の尾）とイオンテイル（イオンの尾）が形成される。核から放出されたガスや塵はロケット効果を生み、塵は徐々に各本体から遅れて行くので、長い尾となり、時には何本もの枝分かれをして扇形に広がるなどする。彗星は、こうした見かけの姿から、彗星の別名も持つのであるが、コメットという英語も、語源は「長い髪」を意味するギリシア語「コメテス」にある。非常に興味深い事に、こうした見立ては現代でも同様に行われるらしく、北尾氏の調査でも報告されている。

ところで、彗星を帚の形に見て、帚星（ホウキボシ、ホーキボシ）と呼ぶケースが多いが、沖縄県島尻郡仲里村真泊の上原星一さんは、「扇の形した星、昭和一九年頃、たまたまオーギボシという星が見えた。全住民が見てる」と伝えていた。扇以外に、次のような見方が伝えられていた。

・イリガンブシ（入り髪星）（沖縄県国頭郡伊江村）……女性が髪を結ぶときにカンプ（うずまき状に髪を結ぶこと）が小さい人は、イリガン（入れ髪）（髪の毛でできたもの）を加えカンプを大きく見せた。彗星がそのイリガン（入れ髪）に似ていることから、入れ髪星と呼んだ。

・ホーチョウブシ（包丁星）（鹿児島県大島郡和泊町）……彗星を遠くから見た場合、包丁のように見えることから包丁星と呼んだ。一五

この昭和一九年の彗星が何という彗星か（エンケ彗星 2P/Encke かとも思われるが）不明だが、長く伸びた彗星の尾

を、髪に見立てる心意は洋の東西、時代を超えて同じであることが解る。また、包丁と見立てたのも、おそらくは菜切り包丁や中華包丁のような長方形ではなく、柳刃包丁のように細長く先の窄まった冷たく光る金属をイメージしたのであろう。

流星の多くは、彗星が撒き散らしていった塵（これを流星物質という）が、地球の大気圏およそ百キロメートル上空で燃え尽き、プラズマ発光する現象であることがわかっている。彗星起源の流星物質は、重さが一個、〇・一グラム・直径一ミリほどの物が大半で、大気中で一秒間ほど光って消える。こうした流星の光度は三等星^{二六}ほどに見え、まれに重さ一グラムほどの物は〇等星ほどの輝きを見せる。彗星の軌道上には、公転しつつ残された流星物質が、川のように流れている。その軌道内を、地球が通過することで流星が生まれるので、塵が拡散しきらずにグループを形成している。「若い」状態のところを通過すると、地球上のある一点を中心として放射状に広がるように一群の流星が出現する。これを流星群といい、放射点のある星座名をとって、しし座流星群、ペルセウス流星群などと名づけられるが、流星物質を生み出した母天体である彗星の名をとった、シヤコビニ流星群のようなものもある。流星が雨のように出現する時、これを流星雨と言ふ。

また、火球と呼ばれる、一般にマイナス3〜4等の明るい光度を持つ流星がある。赤い火の玉状に見えて落ちてくるのであるが、先に述べた彗星起源のものに対し、主として小惑星起源と考えられ、重さも十グラム程度と見られている。もっと大きくなると、落下中に大音響を伴い、あたりが振動することがある。また、落下中に小爆発をくり返して分裂し、榴散弾のように落ちてくるものもある。さらに大きくて燃え尽きずに落下したのが隕石で、古代中国では「天狗」^{二八}とよばれた。以前は流星と隕石は同一起源と考えられ、大気中で燃え尽きるのが流星で、地上に達したのが隕石だとされてきたが、近年の研究により、それぞれの物質組成から言って起源も異なるので、こうした分類は否定された。一九

流星は、実は非常に頻回でありふれた現象である。太陽との距離・角度、大気の状態などにより、肉眼で観察することが稀であるために目立って、却って様々な意味づけをされてしまっただけで、流星物質は日々昼夜を問わず、地球に降り注いでいる。しかし、太古の人々にとつては、超新星爆発は突然現れる見かけぬ星であり、天界の異変である。流星は地に流れ落ちてくる星に見え、見掛けの角度（対象と観察者の位置関係）によっては駆け上がる奔放な星となり、時に轟音を伴って落ちてくる隕石なのであるから、恐れて注視すべき「客星」であることには間違いないだろう。

彗星の尾は、まさに彗星の象徴と言つべきものだが、彗星が太陽から遠く離れたところにいる時は尾は見えない。太陽から三天文単位（ 3×10^8 km）ぐらいに近づく短い尾が生じ、地球の軌道の内側に入る頃非常に長い尾に発達する。この尾は常に太陽の反対の方向に伸びるので、太陽に近づきつつある時は、頭部を先頭にして尾を後にたなびかせながら動いていく。そして、近日点のところでは尾はぐるりと向きを変え、太陽から遠ざかっていく時は、尾が先行して核とコマの頭部を後ろにしながら進むと言う奇妙な形となる。ただし、実際には長い尾をもつていても、地球と太陽と彗星の位置関係の都合で、地球からの見かけでは斜めになつてしまつて短い尾にしか見えないこともある。実際の尾の長さが最も長かつたのは一八四三彗星で、長さは3億キロメートルもあつた。これは地球の公転軌道の直径に等しく、つまり、三天文単位の長さであつた。

彗星の中で最も有名で、「彗星」というと誰もが思い浮かべるのは、ハレー彗星だろう。公転周期約七十六年の短周期彗星で、この彗星の研究のおかげで、彗星が太陽に対して公転周期を持つて回帰する太陽系の天体の一種であることがわかつたのである。エドモンド・ハレー（一六五六—一七四二年）は、自ら行つた彗星観察と古記録を照合し、探動（天体の運動が他の天体の引力の影響を受けて乱れること）を考慮した軌道計算により、古来より多くの文献に記録されてきたこの彗星が、惑星以外の太陽系を公転する天体であることを確認し、回帰することを予言した。ハレーの死後、予言通り回帰してきたこの彗星は、彼の功績を讃えて、ハレー彗星と名づけられた。

約七十六年という、丁度人間の寿命と同じ位の長さで回帰する目立つた彗星であるためか、世界各地、紀元前からハレー彗星とおぼしき記録が文字や絵画、タペストリーとなつて残され、それらの記録は数理的処理を経て、同定されている。前回の一九八六年の回帰を先頭に遡ること三〇周前、紀元前二四〇年の『史記』「新始皇帝本紀 七年条」に「彗星先ず東方に出で、北方に見ゆ。五月西方に見ゆ」とあるのが、明確な観測記録として世界最古のものといされる。

ハレー彗星は、一九一〇年（明治四十三年）の回帰の折は、尾の見かけの長さが二五度もあり、西の地平線から頭上を越えて東天に達するほど長大で、実際の長さも、一億四千万キロメートル、一天文単位弱だつた。まさに、大彗星といふべき出現だつたが、同時に、ハレー彗星の太陽面通過時に、尾の中を地球が通過することや、尾のガスの中に猛毒のシアンが含まれることが知られていた。これらの情報が中途半端な知識となつて広まつたため、地球上のすべての生物が窒息死するとか、地球上の空気が五分間ほどなくなると言つたデマが流れた。そのため、水を張つた桶に顔を

つけて息を止める練習をする人がいたり、自転車のチューブを買い求める人や、悲観するあまり自殺する人も出るなど大騒ぎとなった。実際には、地球は大気の層に守られており、また、彗星のコマを形成している大気は非常に希薄で、シアンも流星物質も大気圏で燃え尽きるなどして地上に届くことはなく、まったく被害はなかったのであるが、科学とメディアの発達が、却って世界中での迷信とパニックを煽ることとなった。

流言飛語が人々の恐怖心を増大させるのは、世の常である。断片的な知識が、却って似非科学に人々を走らせるのは、今現在でもあることである。ごく最近の例では、二〇一〇年十二月十日に発見されたエレニン彗星が、二〇一一年九月に地球と太陽の間を通過する時、巨大な引力が働いて大災害が起るとか、地球に衝突する危機が発生したので、アメリカのホワイトハウスが対策を講じている、といったデマが流れたこともある。これは、恐竜絶滅の原因がユカタン半島のチクシュループ・クレーターを形成した六千五百万年前の小天体の衝突であるという説や、一九〇八年六月三〇日のシベリア・ツングースカの大爆発^三(この二年後にハレー彗星が接近したのも、当時のデマを助長したか)といった、完全には解明されていない天体由来といわれる事件についての曖昧な知識が根底にあるためであろう。

また、太陽以外の天体の異常現象といえは、夜にしか起こらないように思われがちだが、彗星^三も火星^四も、夜だけではなく、昼の明るい空に観測された、十分に明るく目立つものもある。滑稽なまでに人々に恐怖を抱かせた一九一〇年のハレー彗星だが、わずか百年余り前、近代日本においてすら彗星を恐れたのであるから、太古の人々が、「客星」という天体の異常を恐れないはずがないだろう。

五 スサノヲのふるまい

イザナキが、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲを生んで、「吾は子を生み生みて、生みの終に三はしらの貴き子を得つ。」と三貴子の誕生を喜び、三界の分治を命じる。ここから語られる、スサノヲのふるまいを見ていくと、客星としてのスサノヲの姿が浮かび上がってくる。

既に述べたように、彗星の最大の特徴は尾にあり、コメットの語源がギリシア語コメテスにあるように、尾は髪や毛と見なされていた。「汝命は、海原を知らせ。」と命ぜられたスサノヲは、

命させし國を治らさずて、八拳須心の前に至るまで、啼きいさちき。その泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。ここをもちて悪しき神の音は、さ蠅如す皆満ち、萬の妖悉に發りき。

という、ふるまいを見せる。イザナキの命令に従わず、海原の統治をせず啼きいさち、「僕は妣の國根の堅州國に罷らむと欲ふ。故、哭くなり」と願ったササノヲは、イザナキの怒りをかい、「然らば汝はこの國に住むべからず。」と、追放された。そして、アマテラスへの暇乞いと称して高天原へ昇るが、この時もササノヲは、「天に参上る時、山川悉に動み、國土皆震りき。」という事態を引き起こす。

「八拳須」という表現が彗星の尾を表しているとするならば、アマテラスへの暇乞いは、彗星の太陽への接近を表現したものと思われ、「啼きいさち、さ蠅如す」様子は、流星・火球の音という現象を語ったものと考えられる。

『日本書紀』卷三三 舒明天皇九年二月二十三日戊寅の、日本で年月日の確実な流星の記事の初出と言われるものに、流星の音についての言及がある。

大いなる星東より西に流る。便ち音ありて雷に似たり。時の人曰はく、「流星の音なり」といふ。亦は曰はく、「土雷なり」といふ。是に、僧旻僧が曰はく、「流星に非ず。是天狗なり。其の吠ゆる聲雷に似たらくのみ」といふ。

奇しくも、日本の正史での最初の流星の記録は、有音隕石であった。ここで発言している僧旻は、小野妹子を大使とした、推古十六（六〇八）年九月に派遣された遣隋使の中の一人で、隋・唐時代を通じて学僧として留学し、二十四年の長きにわたり仏教文化と学問百般、とりわけ天文・易占の知識を修めて帰国した、当代一の大知識人である。僧旻のこの解説は、現代の天文学的な見地からすれば、奇妙で的外れな感は否めないが、当時最新のもの大陸仕込みの天文分類に従って、旻が解説してみせたという事である。僧旻は、国博士・十師として尊敬され、舒明・皇極・孝徳の三代の天皇に仕えて活躍したので、舒明天皇の治世以降、『日本書紀』の天文記事が増えている。そして『日本書紀』という文書の性質上、当時の“学問上の客観性を保った記述をなされている。

時代はさらに下るが、天武天皇十三年十一月二十一日戊辰（六八五年一月一日）には、

戊辰の昏時に、七星、俱に東北に流れて隕ちたり。庚午の日没時に、星、東の方に隕ちたり。大きき盆の如し。戌にいたりて、天文悉に乱れて、星隕つること雨の如し。是の月に、星有りて、中央に李へり。昴星と雙びて行く。月盡に及びて失せぬ。

との記述がある。齊藤国治氏は、「一つの彗星の出現に伴って、しきりに流星が見られた」ことを記しているとして、

この尾のない彗星は、天武十三年十一月中の二週間ほどのあいだ、夜半に天頂ちかくに現われた。だからそれは地球軌道面内にあつて軌道に直交するかたちで、太陽と反対方向からほぼ地球を直撃する格好で接近してきた。そして彗星といつしよに飛行していた多くの流星物質が、地球大気に突入して、壮大な流星雨を降らせたのである。

と、解説されている。また、対応する同一の彗星記録が、ヨーロッパの古記録にあるという^五。この年は七月にも彗星が観測され、十月には大地震があり、伊豆大島らしき島が隆起し、津波により調を運ぶ船を多数失つたとの記事があり、一連の事件は彗星を凶兆と考える人々の心胆を大いに寒からしめただろう。

「青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。」という表現は、一九〇八年六月三〇日のシベリア・ツングースカの大爆発を思い起こさせる。この爆発の原因は未だに特定されていないが、隕石孔や隕石の残欠が発見されていない事から、地上六〜八キロメートル上空で、彗星、あるいは小型の小惑星が爆発四散したものと考えられている。大地球は、太陽よりも強い光を放ち、強烈な空震を伴って飛来し、爆発した。半径約三十キロメートルにわたって森林が炎上し、なぎ倒され、衝撃による地震が観測されている。千キロメートル離れた地域でも窓ガラスが割れ、発生したキノコ雲は数百キロメートル先からも観測され、巻き上げられた粉塵の反射で光輝現象が起こり、モスクワでは夜でも写真を撮ることができ、パリやロンドンでは三夜にわたり、真夜中でも灯火なしで新聞が読めたという。

このように大規模な火球は衝撃波によって音が出ているが、大規模な物でなくとも、流星は音をたすことが判っている。流星のプラズマが乱流を起し、上空の磁力線を乱す時、非常に低い低周波が発生し、地上の観察者の周りにある物体が共鳴振動する事で音が出ると言われている。「悪しき神の音は、さ蠅如す皆満ち、萬の妖悉に發りき。」という、地上の全ての物が、蠅の羽音のように震え音をたてたというのは、卑見によれば、この共鳴振動による音と考えられる。天岩戸からアマテラスをひき出だし、日神の復活を果たした八百万の神々は、スサノヲに処罰を与えて追放し、スサノヲは去っていく。『日本書紀』では、葦笠を身に着けてさまようスサノヲを神々は拒否するのだが、彗星の異名として、「嫁に行った娘の腰蓑」という意味のものがあるのも、興味深い。また、「鬚を切り、手足の爪も抜かしめて、神逐らひ逐らひき。」という記述も、彗星が太陽から遠ざかるにつれて、コマのガスや塵の噴出が減少して、長さが短くなっている様子を捉えたのだと解釈できるだろう。

以上のように、彗星・流星・火球についての近年の天文学の研究を概観してみると、海原の統治を拒否して天に昇り、高天原のアマテラスを脅かし地上に大混乱を引き起こして、妣の國根の堅州國へと去っていくスサノヲの姿を、「客星」として読み解くことが出来る。

六 海人と鹿

さて、「スサノヲ風神説」に対して大林氏は「アマテラス（太陽）、ツクヨミ（月）の末弟としてスサノヲが風では、どうも釣り合いが取れないのではないか？」と述べられた。筆者にとっては、スサノヲが統治を拒否した「海原」という領域も、「釣り合いがとれないのではないか？」という疑念を抱かせるに十分であった。イザナキ・イザナミによる最初の子産みは、日本の国土の生成であった。最終的には、アマテラスの子孫である天孫の降臨をもって日本の皇統による統治が行われるのだが、そこに至るは出雲の国譲りや神武東征といった段落を含み、支配権の移譲は段階的に行われていく。しかも出雲のオホクニヌシはスサノヲの子孫として位置づけられているのであるから、三界分治の三番目の領域が、中つ国ではなく海原であったことの意味が判然としなかった。しかし、イザナキの「汝命は、海原を知らせ。」という命令の「海原」の意味する世界を再考する時、古代日本人の宇宙観が見えてくると思われる。

既に述べたように、イザナキは、海中での禊で合計六柱の神を生み出し、その内、底・中・上のワタツミの神は全国各地の海部を中央で統括する伴造である阿曇連の祖先神と言われている。『日本書紀』補注一・六三には、ワタツミの神「此の三神を「筑紫斯香神」とし、延喜神名式には筑前国糟屋郡志加海神社三座とある。」この志賀海神社は現在も島内にあり、延喜式神名帳には名神大社として記載されている。そして、神功皇后撰政前紀で、神の告げた「西の国」を探し、「北西に山有り。葦雲にして、横に廻れり。蓋し國有らむか」という報告をしたのは、磯鹿の海人・草であった。

志賀島は福岡県博多湾の北部にあり、現在は砂州によって海の中道で本土と陸続きになって、その上を立派な道路で結ばれているが、昭和二十年代までは満潮時は橋の下を船でくぐる事が出来る、切り離された島であったという。古代には能古島と共に博多湾の島門と詠われ、『万葉集』巻第三に柿本人麻呂が

大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ(三〇四)

大王之 遠乃朝廷跡 蟻通 嶋門平見者 神代之所念

と詠んだように、外海との出入り口であり砦ともなる島で、大型船の停泊に適した風待ちの拠点であった。同じく『万葉集』巻十六に、筑前國志賀白水郎歌十首(二八六〇～二八六九)ニ云があることから理解できるように、外洋に漕ぎ出す航海術に長けた海人が住んでいた。

筆者も以前訪問した事があるが、現在、志賀島の勝山にある志賀海神社には、本殿に隣接して建てられた一万本以上あるという鹿の角を納めた鹿角庫という建物があり、庫内に大量に積みあげられた鹿の角が参拝者の目を引く。この鹿角庫の扉に、その由来として『その昔神功皇后が対馬にて鹿狩りをされ、其の角を多数奉納された事が起源とされる。鹿の角は祈願成就の御礼に奉納され中にはウキを付けて海に流されてきたものを漁師が拾い上げ奉納したものなどがある。現在では一万本以上を数える。』とあり、志賀島の地名由来として、『鹿の島』ではなく「近い島」が「チカシマ→シカシマ→シカノシマ」と訛つたものである』と書かれてあった。『筑前国風土記逸文』(釈日本紀巻六)に、「神功皇后の従者が、「此の島と打冪の濱と、近く相連接けり。殆同じき地と謂ふべし」といひき。因りて近嶋と曰ひき。今、訛りて資珂嶋と謂ふ。」とあるのが出典であろう。つまり、志賀海神社の見解では、志賀島は鹿と無関係とされているのだ。

しかし、これを以って志賀島のシカモは鹿と無縁とは言えず、筆者には「シカノシマ」の地名は、海人と鹿の深い繋がり示唆するものと思われるのである。

『日本書紀』応神天皇十三年九月条の二云に、日向諸県君牛が朝廷から退くに当たり、代わって娘の髻長媛を入させるといふエピソードがある。これは鹿子水門の地名起源説話と結びついた別伝とされるが、平林章仁氏による、興味深い研究がなされている。

応神天皇が淡路島で狩猟をしたときに数十の麋鹿が海を泳いで渡り、播磨国の鹿子水門に入った。不思議に思った天皇が使者を遣わしてよく見させたところ、実は角のついた鹿皮を衣服とした日向の諸県君牛らが髻長媛質上にやつて来たところであった。ゆえに、彼らがついたところを鹿子水門といい、水手（水夫、船を繰る者）を鹿子というようになったと伝えている。この説話は、次の四つの点で注目される。

- ①海を泳ぎ渡る鹿についての知見が説話の背景として存在すること。
- ②地名鹿子及び水手の呼称の起源説話であること。
- ③諸県君牛が有角鹿皮をまとっていたこと。
- ④天皇の淡路島での狩猟の際の出来事と伝えられること。

(中略)

それと関わって、鹿子・水手をともしカコと称したのは、単に同音異義語を基にした付会ないしは説話の創作・伝承（筆録）者の戯作ではなく、カコなる語が鹿子と水手の両者を同時に連想させるような社会的背景が実在していたからではなからうか。それは海を泳いで渡る鹿と水手（海人）との関係であり、渡海中の鹿を射止める海人の鹿猟との関係ではなかったかと推考される。『万葉集』巻七に「名児の海を朝漕ぎ来れば海中に鹿子を鳴くなるあはれその水手」（二四一七）とある歌は、カコが鹿子と水手を同時に連想させる語であったことを明瞭に示している。ちなみに、名児の海は摂津国住吉の辺りである。

平林氏は、著書『鹿と鳥の文化史』で、鹿の動物行動学的にみられる海や河を泳ぎ渡る習性と、海人による鹿の狩猟、

その習性を下敷きとして語られる記紀万葉、風土記中の鹿に関わる諸伝承から、海人の鹿に対する信仰や儀礼、鹿角装のシヤマンについて論じられた。そして「鹿を水と親縁な靈獣」と、古代の人々がとらえ、「場合によつては水を象徴する靈獣と觀念」していたと述べておられる。こうした視点を得て、改めて海幸・山幸と言われる、火遠理命と火照命のいさかひの発端に立ち返ると、興味深い事実がある。それは、鹿の角は、古代において重要な漁労具の原料であったということだ。考古学上「骨角器」と呼ばれる、鹿の角で作られた銛や釣り針は、縄文時代を通じて著しく発展した。

「我と兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひつ。是に其の鉤を乞ふ故に、多くの鉤を償へども受けずて、『猶其の本の鉤を得む。』と云ひき。故、泣き患ふぞ。」とのりたまひき。

ホオリは兄・ホデリから借りた釣り針を紛失し、自分の所有していた剣を壊して箕に一杯の釣り針を作り弁償しようとするが、ホデリは頑なに拒否し、元の釣り針を要求する。これは、平林氏の論の驥尾に付して言えは、水を司る靈獣の力を持った鹿の角製の釣り針でなければ、海人であるホデリは納得しなかったことを暗示していると言えよう。しかし結局、元の釣り針は綿津見神の教えにより呪詛され、塩盈珠・塩乾珠の呪力によりホデリは屈服させられ、この説話は隼人舞の起源として語られるのである。換言すれば、海が山を主として受け入れ、従属することをここに誓ったのである。

また一方、葦原中国の平定のためオモヒカネからアメワカヒコに授けられた、天之麻迦古弓・天之波々矢、あるいは天之波土弓・天之加久矢という神聖な武器がある。平林氏によれば、古代日本の弓矢の形状は、銅鐸に描かれた絵画に典型例が見られるように、握りの位置を弓幹よりやや下にした長い丸木弓で、この形状は空気中よりも水中での貫通力を発揮するので射魚にむいた海人の文化を起源とするものと考えられるという。そして、「日本でも薩南や奄美群島で最近までこの漁法が行われており、カコ弓・カコ矢とは、船上より魚や海獣、鹿などを射留めるのに水手（海人）らを用いた弓矢ではなかったかと考えられる。」と、海人と鹿のかかわりについて考察されている。

葦原中国平定の段では、アメノホヒ、アメワカヒコの失敗を受けて、三番目に葦原中国に派遣する神を選定する際、オモヒカネが、伊都之尾羽張神かその神の子の建御雷之男神を推薦している。天尾羽張神は天安河の水を逆にせき上げ

て道を塞いでおり、他の神はそこへ行くことができないので、天迦久神が使者として遣わされた。

天之尾羽張は、『古事記』の神産みの段において、イザナキがカグツチを斬ったときに使った十拳劍・伊都之尾羽張の別名であるという。アメノカクは、鹿島神宮でタケミカヅチのお使いをする神鹿として知られるように、人格化された鹿である。余人の渡れぬ河を渡りアメノオハバリの住む処へ行けるのは、海川をものともしない鹿だけだったのである。鹿は、陸に生まれ育つ生き物でありながら、海川を絶対不可侵な境界線とすることなく、別のフィールドへと移動して行く特殊な能力を持つ生き物と認識されたのである。

海は太陽、月、その他天体の出入りする場所であり、住吉三神の神話を踏まえて考えれば、星の生まれた場所ともいえる。特に日本の国土は四方を海に囲まれ、海の遠い果ては空の始まりのように見えている。天尾羽張神は、海面から逆巻き天に向かう大河・天の川の向こう側に息子の雷の神と住んでいた。海川を渡って使者の役目を負って行くのは、鹿の神である。鹿の夏毛はいわゆる鹿の子模様シロと言われる白い斑を特徴とし、この白斑を星と呼ぶという。つまり、アメノカクという鹿の神はアナロジカルな意味で星でもあったのである。鹿と海人の同質性を鑑みて言うならば、志賀島の海人が新羅の国土を探し出し、住吉三神という星の神の導きで神功皇后を導いたのは、当然の帰結であろう。海人はただ単に海産物を奉る、第一次生産者ではない。天文の知識を駆使して、自在に大海原を渡る、パイロット・水先案内人であった。天と海をつなぐ人々とも言えよう。

おわりに

現代人は、地球の丸い事を知って、海を果てまで目指しても、宇宙に行き着く事は無い事を知っている。現代の自然科学の知識では、海と空、地球と成層圏外の宇宙は明確に分断され、ジェット飛行機や宇宙ロケットに乗って移動することでもない限り、往來の不可能な別世界である。ちよつとした小旅行でさえも、交通機関の有無や、自動車のルート検索をして、「遠い、不便だ」と諦めてしまう。しかし、古代の人々にとっては、基本的に移動はすべて徒歩、船は人力による操船しかなく、交通の難所は「半ば生き、半ば死す」崇り神の跋扈する世界であつて、陸上も海上も厳しい行程で旅はすべて命がけの旅であつた。

しかし反面、晋の張華の『博物誌』に、海の果てを自指した人が、その先に天漢も遡り牽牛宿に客星となつて現われたとあるように、苦難に満ちた海路を渡れば天頂にも到達する事が出来ると考えた。その意味でウナハラはクサハラ(草原)二元と同じく、船で漕ぎ渡り得る連続した世界であり、その海原の先には天の川が天上界に導く道のように突き立っていた^{三〇}。こうした世界観を持つ人々にとつて、鹿は易々と海を越えて行く靈妙な生き物であり、同時に星であり、鹿と同一視される海人は、星と潮流の知識を駆使して外海に漕ぎ出して行く特殊な技術を持った集団であつた。

だとすれば、海原は天と地の間にあつて、二つを決定的に引き裂くものではない。危険で困難を伴いながらも、高天原という天界と葦原の中つ国を仲介する役割もはたす両義的な領域である。イザナキ・イザナミの国産みの果てに、その国土を直接支配するのではなく、日神の子孫が天下り、支配を固めていくという『古事記』『日本書紀』のロジックの中で、スサノヲの果たす役割は、高天原でも中つ国でも《客》体としてあつたと言えるのではないだろうか。

三貴子の誕生と、イザナキの命による三界分治の命令で、日神と月神に対して、一人スサノヲは海原を知らせと命ぜられる。今ひとつ判然としないスサノヲの神格は、『嵐神説』を中心として様々な解釈がされてきた。それは日本神話の重層性をしめすものでもあるが、海から立ち昇る雲が風雨を運び、また大海へと回帰するように、複雑な水の循環^{三一}の隠喩とも思われる。本論においては、古代中国の天文学の概念としての「客星」という分類概念を手掛かりに、この二三十年の間に解明されてきた、彗星・流星・小惑星あるいは隕石といった天体由来の現象についての自然科学上の研究成果を援用して、日本神話の星神とスサノヲの天体神話論的分析を試みた。彗星研究は前回一九八六年のハレー彗星の回帰以降、飛躍的に進み、太陽系・地球の誕生に関わる研究も日々新たで、筆者の誤読もあるかもしれない。またスサノヲのウケヒと宗像三女神の三社、草薙の剣と韻鉄^{三二}といった興味深い事柄はあるが、本論はここまでとしたい。筆者自身の星の体験は、三十数年前、アメリカのヨセミテ国立公園で見た、満天の星である。ロジックの前の芝生に寝転んで見上げた満天の星空は、まさに天蓋を思わせ、星空を見つめると、次第に自分の体が宙に浮くような浮遊感が生まれ、宇宙は地上の自分の体を取り巻く直ぐそばにあるのだと、ある種の畏怖を持つて感じたことを今も思い出す。現在の東京都心では、流星の音を聞くどころか、一等星もかろうじて数えられるかどうかという環境である。それでも、ヨセミテでのわずか一晚の(それも数十分であつたと思う)体験が、スサノヲの神格に天体神話としての側面を読み解こうという試みの根底にあることを付け加えておきたい。

- 一 『日本書紀 上 日本古典文学大系』坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 一九九二年五月十五日 第二九
刷発行 岩波書店
- 二 『早稲田大学蔵 資料影印叢書 国書篇 第一巻 倭名類聚鈔 一』 昭和六十二年九月十五日初版発行 早稲田
大学出版部
- 三 丹後風土記逸文にある
- 四 編集委員代表 谷川健一 「住吉大社神代記」『日本庶民生活資料集成 第二十六巻 神社縁起』一九八三年三月
三十一日 第一版第一刷発行 三一書房
- 五 内田武志『日本星座方言資料』改題して『星の方言と民俗』一九七七年二月一五日 第二刷発行 岩崎美術社
- 六 北尾浩一 『星と生きる―天文民俗学の試み』二〇〇一年三月 第一刷発行 ウィンかもがわ
- 七 北尾浩一 『天文民俗学序説―星・人・暮らし』二〇〇六年五月 第一刷発行 日本図書センター
- 八 野尻抱影『星の民俗学』一九九四年八月十五日 第十二刷発行 講談社
- 九 大林太良 「スサノワは金星か」『比較神話学の展望』松原孝俊 松村一男 編 1995.12 青土社
- 一〇 藤堂明保編 『例解学習漢字辞典 第六版 ワイド版』二〇〇四年三月十日第二刷発行 小学館
- 一一 沖森卓也 三省堂編修所 『五十音引き漢和辞典』二〇〇五年二月十日 第二刷発行 三省堂書店
- 一二 注一〇に同じ藤堂明保編 『例解学習漢字辞典 第六版 ワイド版』二〇〇四年三月十日第二刷発行 小学館
- 一三 斉藤国治 『星の古記録』一九八二年十月二十日 岩波書店
- 一四 長谷川一郎 『ハレー彗星物語』一九八四年七月一日 第一刷発行 恒星社厚生閣 ほか参照
- 一五 北尾浩一 『星と生きる―天文民俗学の試み』二〇〇一年三月 第一刷発行 ウィンかもがわ
- 一六 天体の明るさを表す尺度を等級といい、恒星の明るさを表す場合に「x等星」などと呼ぶ。目安として最も明るい星を1等星、肉眼でかろうじて見えるくらい星を6等星として、間を6段階に分けることから始まって、1等星と6等星の明るさの差がおよそ百倍であることから、一等級の差は約2.5倍とされ、小数や負の数まで拡大している。数が

小さいほど明るく、この座のベガは0等星、シリウスは-1.6等星、満月の月は-12.6等、太陽は-27等、最も明るく時の金星は-4.5等ほどになる。

一七 渡辺美和・長沢工 『流れ星の文化誌』 平成二二年三月十八日 初版発行 成山堂書店 ほか参照

一八 「晋書天文志」 藪内清責任編集 『世界の名著 続1 中国の科学』 一九七五年三月 中央公論

一九 斉藤国治 『星の古記録』 一九八二年十月二十日 岩波書店 参照

二〇 天文単位とは、天文学で用いる長さの単位で、地球と太陽との平均距離をほぼ1とする。1天文単位は約1.5億キロメートルに相当する。

二一 富田弘一郎 『彗星の話』 一九七七年十月二十日 第一刷発行 岩波書店

二二 一説には、メタンハイドレートの爆発説もあるが、現段階では、巨大な火球が、地上に達する前に上空で爆発し、シベリアの原野の木々をなぎ倒し、膨大な量の粉塵を撒き散らしたと考えられている。

二三 富田弘一郎 『彗星の話』 一九七七年十月二十日 第一刷発行 岩波書店 参照 日中でも見える彗星 ウェスト彗星一九七五年、一九七六年三月三日の夜明け前、東の空に雲かと見まちがうほど明るい、長い尾をたなびかせた大彗星が現れた。あたかも、鳥の羽根で出来た驚ペンを使って左手で字を書いているような形で、ペン先にあたる彗星の頭部は明るく輝き、明けの明星、金星をしのぐほどであった。」

二四 リチャード・ノートン 『隕石コレクター』 江口あとか訳 二〇〇七年六月十五日 初版発行 築地書館

一九七二年八月十日、アメリカワイオミング州グランドティートンのジャクソン湖の湖畔で、昼、ロッキーマウンテン上空の快晴の空を、時速五万三千キロメートルの速度で、約千五百キロメートル（滞空時間一〇一秒）の軌跡を残して、ふたたび大気圏外に去っていった火球が、写真と動画で記録されている。

二五 斉藤国治 『星の古記録』 一九八二年十月二十日 岩波書店

二六 志賀の荒雄という名の海人の海難死を悼む十首の歌である。神亀年代に起きた対馬への官の食糧輸送船の海難事故で、歌の左注により、荒雄が大宰府が任命した宗形部津麿の代わりに、対馬航路の水先案内人として乗船し遭難したことがわかる。

二七 志賀島のシカには、磯鹿（日本書紀神功皇后の項）・資珂（筑前国風土記）・志加・志珂・思香・斯香・鹿・然・近・志賀などが当てられている。訛にしては、シカの音に拘泥しすぎる感がある。

二八 鹿の《子》模様という名称、あるいはデイズニー映画の『パンビ』の印象から、鹿の背中の白斑は、小鹿の特徴であるとの誤解が一般にあるが、背中に白い模様があるのは鹿の夏毛の特徴であり、立派な角の雄鹿も雌鹿・子鹿も夏毛は背中に鹿の子模様がある。東洋では、昔から星を表すシンボルは○印であって、日本語の「ほし」は小さな丸い点を意味している。『今昔物語』巻二十八・三十七に「夏毛の行騰《行騰》の星付白く色赤きを履たり」との描写があり、鹿の夏毛は白斑が鮮明であることがわかる。

二九 第二次大戦中、中国での陸軍の教育として、広大な中国大陸で方位を見失わないために、星の知識を教えたという話がある。目当てとなる山や、地形的な特徴が乏しい大陸の原野では、海原と同じく星を目当てとすることが必要だったのである。

三〇 芭蕉の有名な句に「荒海や佐渡に横たふ天の川」があるが、考証によればこの句の頃の天の川は、佐渡の上空には横たわるのではなく、突き立つように見えるという。句の価値には関係のない話だが、海と星空の連続性を一層強く感じさせられる。

三一 ルイス・フランク「スモール・コメッツの飛来」

地球の海水の二〇〜三〇パーセントは、原始地球におびただしい数の彗星が衝突してできた、彗星由来の水という説がある。そして現在も、宇宙から飛来するほとんど氷でできた小さな彗星が気圏に衝突して水を撒き散らしているという。NHK科学番組部編『NHKサイエンスアイ 宇宙デジタル図鑑』二〇〇〇年四月二十五日第一刷発行 日本放送出版協会

三二 韻鉄の利用例として、グリーンランドでイヌイットがナイフや鉈を作るのに利用していた、「女」と「犬」と「テント」と名づけられていた巨大な三つの鉄隕石がある。リチャード・ノートン『隕石コレクター』を参照。また、旧幕臣で明治政府になって海軍大臣も務めた榎本武揚が、白萩韻鉄から長刀二振り・短刀三振りを作らせた。これらを流星刀といい、その内長刀一振りが大正天皇に献上された。残りの韻鉄は、上野の国立科学博物館に展示されている。